

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：87106

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01218

研究課題名（和文）公武の信仰を統合した足利将軍家の宗教政策からみる室町時代の宗教絵画の包括的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Research of Religious Paintings in the Muromachi Period from the Religious Policy of the Ashikaga Shogunate

研究代表者

畑 靖紀（HATA, Yasunori）

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部文化財課・主任研究員

研究者番号：80302066

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,310,000円

研究成果の概要（和文）： 仏教と神道の宗教美術は、古代より日本美術の根幹をなす分野である。しかし室町時代に限るなら、宗教美術に関する研究は少なく、この分野に関心が向けられる機会は稀である。しかし室町時代の文化は、日本文化の規範として現代まで継承される重要な意義を持つ。また当時、政治の実権を握った足利将軍家は、武家の宗教儀礼を新たに創出し、さらに本来は天皇家が挙行すべき国家的な修法も代行し、公家と武家の宗教文化を幅広く担うという明確な特徴をもつ。

そのため本研究では、歴史的に重要な室町時代の仏教・神道絵画の歴史的な意義を、多彩な宗教美術を総合的な宗教政策の下で制作させていた足利将軍家との関係から研究する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

室町時代・15世紀前半は、足利将軍家が文化のジャンルを再編し、床の間の座敷飾りや茶道、華道など、主に禅宗の仏教文化をベースとしながら、今日まで受け継がれる日本文化の原型を形成した極めて重要な時期である。そのため美術史の立場から、宗教美術に注目して日本文化の展開を包括的に論述する研究が必要不可欠である。この問題意識のもと遂行される本研究は、「水墨画」や「やまと絵」という既成の分野の枠組みを横断する広がりをもつため、室町絵画を統一的に考察するための重要な学術的意思をもつ。その分析を通じて、本研究は室町絵画の新たな言説の獲得と再評価を目指すものである。

研究成果の概要（英文）： Religious art of Buddhism and Shinto has been a cornerstone of Japanese art since ancient times. However, there is few research on Muromachi religious art. However, Muromachi culture has the important significance of being passed down to the present day as a model of Japanese culture. At that time, the Ashikaga shogunate, with the power of politics, created new religious ceremonies for the Bushi warrior, and also acted as a proxy for the national religious ceremony to be performed by the imperial family. In this way, the Ashikaga family have distinct characteristics to be widely responsible for the religious culture of both the Kuge court nobles and the Bushi warrior.

Therefore, in this research, we will study the historical significance of Buddhist and Shinto paintings of the Muromachi period from the perspective of their relationship with the Ashikaga shogunate, who had a variety of religious art produced under a comprehensive religious policy.

研究分野：美術史

キーワード： 顕密絵画 禅宗絵画 神道絵画 室町水墨画 室町絵巻

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 室町時代の宗教絵画に対する美術史の研究成果は極めて少ない。その主な要因は二つあり、一つは宗教絵画の研究者の大半が鎌倉時代までの作品を研究の対象に選択する状況で、もう一つは室町時代の絵画史研究者が宗教図像学の理解に乏しく、この分野の研究を遂行しない状況である。しかし当時の画家の社会的属性に眼を向け、雪舟など水墨画家の多くが禅僧であること、法橋などの僧位をもつ絵師が活躍することに気付くなら、室町絵画と宗教の強い結び付きは自明で、この観点による研究が不可欠であることは論をまたない。

一方、近年の研究動向をみれば、江戸時代の仏教美術に関する基礎的な調査が各地で進められ、室町時代でも彫刻の分野では研究成果が公刊されるため、重要な意義をもつ室町時代の宗教絵画の研究が停滞する現状には大きな問題がある。

(2) また宗教絵画に限らず室町時代の絵画は、「日本美術史」の言説が近代に誕生してから一貫して重要性が認識されてきたが、近年そのプレゼンスが相対的に著しく低下している。例えば『日本美術全集』の扱いをみると、室町絵画は1990年代の講談社版(全24巻)では2冊が割り振られるが、2010年代の小学館版(全20巻)でわずか1冊となり、20年の間に他の時代に比べて紙幅が最も縮小された。この変化は、18世紀の京都画壇の奇想派や、戦後20世紀の現代絵画に対する関心の高まりに相反する現象である。その遠因として想定されるのは、室町絵画の研究者が水墨画かやまと絵かいずれか一方のみを専門とする傾向が非常に強いことである。このジャンルの分断は、室町絵画の豊かさを統一的観点から通覧して、時代の特徴を大局的に説明することを困難にしていると考えられる。しかし室町時代、とくに15世紀前半は、足利将軍家が文化のジャンルを再編し、床の間の座敷飾りや茶道、華道など、主に禅宗の仏教文化をベースとしながら今日まで受け継がれる日本文化の原型を形成した極めて重要な時期である。そのため美術史の立場から、宗教美術に注目して日本文化の展開を包括的に論述する研究が切実に求められる。

(3) この問題意識のもと本研究は、これまで成果の少なかった宗教絵画に着目して研究を遂行する。それらは足利将軍家の総合的な宗教政策のもとで制作されたため、水墨画とやまと絵という枠組みを横断する広がりをもち、室町絵画を統一的な視点から考察するための絶好の研究対象と言える。さらに本研究は、後述のように、この室町時代の宗教絵画の成立過程を一連の制作システムと捉えて分析する。そして、この分野が日本美術史において重要な意義をもつことを説明し、室町絵画の新たな言説の獲得と再評価を目指すものである。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、絶大な実権を背景に足利将軍家が総合的な観点で制作させた室町時代の多彩な宗教美術を研究対象に選択して、従来の研究状況に起因する水墨画とやまと絵の分断を克服し、室町絵画の多様性を論述する枠組みを実践的に確立することを目指すものである。その研究対象に選択する宗教絵画は、狭義には着色画の尊像や垂迹画などが想定されるが、本研究では範囲を緩やかに設定し、これらに加え奉納品の縁起絵巻や水墨画の仏画なども宗教的な機能をもつと評価し、積極的に研究対象とする。それらを考察する研究成果は少なく、その意義を当時の文化政策の中で体系的に論述する研究もみられないが、この動向に対して、本研究は当時の文化を主導した足利将軍家の宗教政策が生み出した宗教絵画を、統一的な観点から考察する課題設定に学術的独自性があると言える。

(2) その宗教政策は禅宗の保護が強調される傾向があるが、実態としては顕密寺院を軸に仏教界を編成するもので、幕府は朝廷の領域をも吸収して公家と武家の祈祷システムを統合した。その祈祷の確立は、室町幕府の安定期である15世紀前半に、足利義満・義持・義教らが軍事と政治、経済、さらに公武の文化を一手に掌握した動向の一部である。とくに新たに武家の宗教儀礼を創出するにあたり、先行する中国の仏教儀礼が参照されたことが指摘されているが、この観点からの美術史研究は進んでおらず、中国美術の受容の問題として重要である。また将軍家が確立した祈祷システムは、応仁の乱以降に室町文化のレガシーとして継承され、足利義政など足利将軍家だけでなく、古河公方や関東管領、周防大内家など地方権力の宗教政策のモデルとなる。つまり本研究は、足利将軍家の宗教政策と宗教美術とを題材として、日本と中国・朝鮮との交流を、国内においても中央から地方への文化の伝播を具体的に考察する視座を設定することが可能であり、東アジアにおける足利将軍家の宗教文化の位置付けを解明する端緒になると想定される。このように本研究は、その文化交流史の成果をもとに、足利将軍家が編成した文化のなかでも宗教政策に直結する幅広い宗教絵画を総合的に研究することに独自性がある。

### 3. 研究の方法

(1) 計画会議の開催：各年度、6月までに開催する。研究内容について進捗管理担当を中心に当該年度の研究方針を決定する。とくに最終年度には、それまでの調査研究を小括し、足利将軍家の制作システムに関する研究成果を具体化する方針について協議する。

(2) 絵画作品の調査：計画会議において決定した研究方針に基づいて、調査対象とする絵画作品を選定し、合同調査を年2回程度実施する。このほか、各々が適切な時期に個人調査を実施する。その成果として収集した画像を適切に共有し、効率的に研究を行う。

(3) 文献資料の読解：計画会議において決定した研究方針に基づいて、対象とする関連資料を選定し、専門が近く必要性の高い代表者・分担者が読解を随時実施する。必要に応じて読解の成果を適切に共有し、効率的に研究を行い、学界において必要性の高いと判断される文献資料については、ホームページなどで内容を公表することも視野に入れて研究を遂行する。

(4) 研究報告会の開催：各年度、7月以降に2回程度実施し、研究の進捗状況や課題を適切に共有する。その上で足利将軍家の制作システムを検討する観点から、研究内容について討論を重ねる。また米国と台湾での調査の際には当地の研究者と情報交換を行い、自由討論の機会を設定する。その総合的な研究の成果を、研究者を対象とする研究集会を開催して公表する。

### 4. 研究成果

(1) 上記の研究方法をもとに、各年度に計画会議を開催して研究方針を決定し、絵画作品の調査と文献資料の読解を随時、遂行した。

(2) なかでも絵画作品の調査については、当初3ヶ年の計画が新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて4ヶ年に延長された研究期間に、計7回の下記の合同調査を遂行し、当初計画の海外調査を遂行することはできなかったものの、年2回程度とした研究計画を概ね順調に遂行した。

【2019-1】2019年7月21日 九州国立博物館

【2019-2】2019年11月15日・16日・17日 洞春寺・山口市歴史民俗資料館・山口県立美術館・周防国分寺・龍蔵寺

【2020-1】2020年9月24日・25日・26日 九州国立博物館・中津市歴史博物館・大分県立歴史博物館・如法寺・求菩提資料館・羅漢寺

【2021-1】2021年10月23日・24日 鎌倉国宝館

【2022-1】2022年7月22日・23日・24日 大蔵経寺・一蓮寺・山梨県立博物館

【2022-2】2022年12月6日・7日 地福寺・興昌寺・三角寺

【2022-3】2023年1月6日 東京国立博物館

(3) また研究報告会のうち、研究者を対象とする研究集会については、下記の通り3回実施することができた。

(A) 公開シンポジウム「室町水墨画における中国道釈画の受容」、2019年11月16日、山口県立美術館

(B) 研究会「室町時代の観音懺法と観音变相図」、2021年10月22日、鎌倉国宝館

(C) 研究会「室町時代宗教美術研究会」、2023年1月6日、東京国立博物館

まず(A)では表題に関する最新の成果を踏まえた研究発表及びパネルディスカッションを行い、研究者から一般の美術愛好者まで51名の聴講者を向かえることができた。また後2者は新型コロナウイルスの感染拡大の影響のため聴講者を限定せざるを得なかったものの、とくに(B)では近年、研究者の高い関心を集める表題作品に関する集中的な研究発表をもとに活発な討議が行われ、当該分野の今後の研究の基礎となるきわめて重要な意義をもつ研究会となった。(C)では室町仏画の分野を中心に、これまでの本研究の合同調査および個人調査を踏まえた研究発表と総括的な討議を行った。本研究では、とくに中世の顕密絵画に詳しい知見をもつ研究分担者の研究成果を共有することができ、今後の調査研究の方向性を明確にする大きな収穫を得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 畑靖紀	4. 巻 1505
2. 論文標題 夏珪の瀟湘八景図と室町水墨画 東山御物の規範性に関する試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国華	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川攝一・吉田豊	4. 巻 1495
2. 論文標題 地蔵菩薩像 (マニ像)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国華	6. 最初と最後の頁 33-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井戸美里	4. 巻 4
2. 論文標題 屏風絵と貴族社会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東アジア文化講座	6. 最初と最後の頁 165-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川攝一	4. 巻 1
2. 論文標題 仏画における画絹調査ー概要と展望ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 絹織製作技術	6. 最初と最後の頁 10 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川 攝一	4. 巻 -
2. 論文標題 大和文華館の原三溪コレクション	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 横浜美術館編 『原三溪の美術』 求龍堂	6. 最初と最後の頁 71-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荏開津通彦	4. 巻 -
2. 論文標題 大内氏と雪舟	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『室町戦国日本の覇者 大内氏の世界をさぐる』 勉誠出版	6. 最初と最後の頁 354-366
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荏開津通彦	4. 巻 -
2. 論文標題 雪舟の仏画 《騎獅文殊・黄初平・張果老図》を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『雪舟の仏画 初公開の《騎獅文殊・黄初平・張果老図》を中心に』 山口県立美術館	6. 最初と最後の頁 38-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 畑靖紀	4. 巻 217
2. 論文標題 大内氏の美術 武家の故実と絵師	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『歴博』	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井戸美里	4. 巻 246
2. 論文標題 歌枕の再編と回帰 「都」が描かれるとき	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アジア遊学』	6. 最初と最後の頁 124-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 森實久美子
2. 発表標題 周防国分寺蔵土佐行広筆仏涅槃図について
3. 学会等名 室町時代宗教美術研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古川攝一
2. 発表標題 醍醐寺の中世仏画
3. 学会等名 室町時代宗教美術研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中川満帆
2. 発表標題 鎌倉・光明寺の浄土三曼荼羅 観徹とその時代
3. 学会等名 室町時代宗教美術研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 「応永・永享年間における本尊の空間について 『看聞日記』の導場をめぐる室礼の記述を中心に
3. 学会等名 室町時代宗教美術研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鷲頭桂
2. 発表標題 宇佐神輿絵と加賀守
3. 学会等名 室町時代宗教美術研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 『看聞日記』のかの室礼
3. 学会等名 第57回芸能誌研究会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 HATA Yasunori
2. 発表標題 Discussant, 'Panel 5: Moving Objects, Styles, and Meanings'
3. 学会等名 International Online Symposium "Beyond the Southern Barbarians: Repositioning Japan in the First Global Age" (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井戸美里
2. 発表標題 想像の「東洋」 - 「海鶴蟠桃図」の系譜に関する図像学的研究
3. 学会等名 第二回国外所蔵韓国文化在 保存・復元 国際シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 畑靖紀
2. 発表標題 東アジア絵画と文化交流
3. 学会等名 国際ワークショップ「東亜絵画策展人経験分享工作坊」国立故宮博物院・台湾（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古川攝一
2. 発表標題 密教図像の動物たち
3. 学会等名 奈良国立博物館「仏教美術にみる動物のすがた」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畑靖紀
2. 発表標題 室町仏画研究の現在 課題と展望
3. 学会等名 雪舟研究会シンポジウム「室町水墨画における中国道釈画の受容」（招待講演）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 荅開津通彦
2. 発表標題 室町時代における異種配合の三幅対
3. 学会等名 雪舟研究会シンポジウム「室町水墨画における中国道釈画の受容」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梅沢恵
2. 発表標題 室町仏画における図像の解体と変容
3. 学会等名 雪舟研究会シンポジウム「室町水墨画における中国道釈画の受容」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西谷功
2. 発表標題 宋式仏堂空間の荘嚴 泉涌寺を事例に
3. 学会等名 雪舟研究会シンポジウム「室町水墨画における中国道釈画の受容」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷺頭桂
2. 発表標題 集められた扇絵 九州国立博物館所蔵「扇面画帖」の修理報告
3. 学会等名 第5回源氏絵データベース研究会シンポジウム「室町時代源氏絵研究の最前線」(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 一瀬智、畑靖紀、森實久美子、他全13名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 九州国立博物館	5. 総ページ数 304
3. 書名 『室町将軍 戦乱と美の足利十五代』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	古川 攝一 (FURUKAWA Shoichi)  (70463297)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員  (82619)	
研究分担者	森實 久美子 (MORIZANE Kumiko)  (70567031)	独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部文化財課・室長  (87106)	
研究分担者	鷲頭 桂 (WASHIZU Katsura)  (90590448)	独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館・学芸部博物館科学課・主任研究員  (87106)	
研究分担者	井戸 美里 (IDO Misato)  (90704510)	京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授  (14303)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	荏開津 通彦 (EGAITSU Michihiko)	山口県立美術館・普及課・課長	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中川 満帆  (NAKAGAWA Maho)	鎌倉国宝館・学芸員	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関